夢の道

関門海底国道トンネル

古川 薫

文藝春秋

夢の道

関門海底国道トンネル

古川 薫

文藝春秋

著者略歴

1925年、山口県下関市に生れる。山口大学卒業。山口新聞編集局長を経て、文筆生活に入る。1991年、「漂泊者のアリア」で第104回直木賞を受賞する。著書に「正午位置」「幻のザビーネ」「わが風雲の詩」「勇者のモデル」「天辺の椅子」などがある。

夢の道（ゆめのみち）　関門海底国道トンネル（かんもんかいていこくどうトンネル）

平成五年六月十日　第一刷

定価はカバーに表示してあります

著者　古川薫

発行者　阿部達児

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）三二六五―一二一一

本文印刷　理想社
付物印刷　凸版印刷
製本所　中島製本

万一、落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取替え致します。小社営業部宛お送り下さい。

© Kaoru Furukawa 1993

Printed in Japan

ISBN4-16-314040-9

目

次

Ⅰ 関門海峡 7
林檜の歩道
トンネル馬鹿
Ⅱ 魔海への挑戦 27
モザイクの地層
御裳川の流れ
大自然を測る
最初の人柱
大金を食うトンネル
海底の鍾乳洞
先陣争い
戦火
Ⅲ 海の廃墟 104
米軍機襲来
トンネルを救え
GHQとの闘い
豆トンネルと花嫁

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

Ⅳ 断層破砕帯 148
鎖が解ける日
迷走電流
ルーフシールド
花嫁遭難
船の音が聞こえる
目覚める長尾類
Ⅴ 地球芸術 184
全線貫通
夢ひらく
海峡のほとり
東京湾横断トンネル
参考書・文献 214
あとがき 215

装幀　坂田政則

夢の道

関門海底国道トンネル

I　関門海峡

林檎の歩道

ステンレス鋼板でかこまれた密室の扉が開き、地下のエレベーター・ホールに吐き出されたのは、麻の夏服を着た背の高い老紳士と小学生三人だけだった。

厚い岩盤の重みをささえた大円柱のそばに立って、彼はちょっとの間、周囲を見回してから人道の入口にむかった。蛍光灯に照らされた真昼の明るさの中を、下り坂となって一直線に遠くまで延びた海底の廊下を、一歩ずつ踏み締めるように歩き出す。

――おい、しばらくぶりだったなあ。私だよ。住友(すみとも)だよ。

胸の中で語りかけてみるのだが、トンネル内はすっかり改装されて、三十年ぶりにこの人道に降りてきた男の目には妙に面映ゆい。

歩道の腰壁は、昭和三十三年（一九五八）に完工した当時、下二段にコバルト色、上十三段にクリーム色のタイルを張っていたはずだが、今は全面をシルバー・グリーンに塗り立てている。

地表から七十メートル下の地殻を横穴に掘り抜いた七百八十メートルという長い人道トンネルである。

単調な壁に両側から圧迫された歩行者は、どうかするとあのドイツの芸術史学者ヴォリンゲルが言う空間恐怖に襲われるかもしれない。古代人なら幾何学模様を彫りつけるところだろうが、ここには絵本のさし絵に似た林檎の木が描かれている。芥子色に塗った敷石部分に、林檎の葉を散らしているのも、建設当時の技術者が考えつかなかったことだ。このごろの若い人は味な真似をするものだと感心する半面では、時のうつろいが心に染みた。

子供たちは住友を無視して、てんでに奇声を上げながら、その林檎の落葉を踏んで走り出した。遠近法の狭い視野の遥か先で跳びはねている小さな群れを見ているうちに、海底のトンネルを通り抜けることへの興奮がやはりそうさせるのだろうと、ふと思えてきた。

独りうなずいて、彼はあたりに目をやった。掘削当時、海底部は湧水がとくにいちじるしく、トンネルの底にあたる歩道は湿ってじめじめしていた。それを特注のブロックで舗装し、裏面を水が流れるように設計したので、表面が乾燥した状態になっている。一皮剝けば、当然のことながら三十年前の仕事がそのまま生きているのだ。

傾斜が上向きになったあたりで、壁面と路面に山口県・福岡県と大きく書いてある。この真上の岩盤二十メートルの表皮に関門海峡の暗い谷底が接している。掘削前の潜水調査によると、海底には巨岩が積み重なって、洞窟のような暗黒の口を開けており、それに吸い込まれそうになっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た豆潜水艇が浮上困難におちいって、乗組員をぞっとさせたこともあった。

蓮根の切り口に似たトンネル海底部の断面図を彼は思い浮かべた。直径十一メートルの巨大なチューブは、排気孔・車道・二つの送気孔に挟まれた人道など、五つに分かれている。頭上を車が走っているのだが、約三十センチの床版にへだてられて、騒音らしい気配は伝わってこない。送り込まれてくるかすかな通風音がそよぐだけだ。ふと立ち止まって壁に耳をあててみる。しんとして何も聞こえない。

ここは最も難工事だった海底部の断層破砕帯である。工事中の切羽（切端）で破砕帯へのセメント・ミルクの裏込め注入作業をやめると、うおんうおんという音が頭上から響いてきて、「関門海峡で滅亡した平家の怨霊ではないか」と、掘削現場にいた作業員が恐ろしげに言い出した。時代の流れに抗しきれず滅亡した平家の軍兵たちのうめき声にも、一瞬うけとれるほどの不気味な音だ。他愛ない幻想だと、地上にいる人々は嗤ったが、落盤の危険に脅えながら作業に従っている者の恐怖を知らないからである。それは地殻変動による断層面が擦り合って小石のように砕かれた地層の間隙を縫い、海峡を通る船のスクリュー音やエンジンの音が、地底の唸りのように響いてくるのだった。

掘削工事は、二十一年間にわたる試行錯誤の連続で、延べ四百五十万人の労働者が文字通りに心血を注ぎ、五十三人にのぼる人柱を埋め込んで出来上がった海底隧道を、住友彰は今、かつての仲間が集まってくる対岸をめざして海の底を歩いている。背筋をのばし、古稀を過ぎた人とも

思えないしっかりした足どりである。

やがて門司側人道口のエレベーター・ホールに出た。はしゃぎまわっていた子供たちの姿はもうそこになかった。住友は腕時計を覗いた。十三分かかってトンネルを抜け出たことがわかる。

エレベーターで地上に吊り上げられ、真夏の午後の陽が照りつける広場に出て、もう一度時計を見る。「関門会」の定刻までまだ三十分はあるのを確かめ、白い立坑の建物の横に通ずるコンクリートの階段をのぼった。そこは小公園になっていて、奥まったところに慰霊碑がある。怪鳥が羽をひろげたように勢いよく葉を反り返らせた幹の太いフェニックス椰子(やし)が二本、それを門柱にして正面に黒御影石を張り合わせた碑が建っており、「慰霊碑」と彫られている。うなだれて合掌していると、すぐそばの立坑から換気ファンの作動する音が、澄んだ空気をかすかに震わせていた。

それから彼は引き返して、階段の途中で足を停め、群青に染まった急潮を押し流している海峡を、まぶしそうにながめた。目の前を悠々と鳶(とんび)が旋回していた。広げた翼の先は、風雪と戦った末にそうなったのか、無残にささくれ立っているのが、やや傾きかけた陽に透けて見えた。

道路を横切って和布刈(めかり)神社の境内に入る。玉垣から乗り出すようにすると、眼下は岩礁になっており、西流れの潮が岩に突き当たって、ざわざわと音をたてながら渦を巻いていた。

夏潮の今退く平家亡ぶときも

俳人虚子がここに立ったのは、いつのことだったのか。彼が門司経由の欧州航路でフランスにむかった昭和十一年だとすれば、それは関門トンネル着工の前年である。大学を出て間もない住友が、内務省の関門架橋計画の一員として、吊り橋の設計計算に熱中しているころである。あの当時はトンネルではなく、橋をかけようとしていたのだ。

虚子は東流れの退き潮を見たのだろう。寿永四年のあの時刻には満潮の西流だったことが、歴史学の定説となっている。平家の軍船はその急流に押され、源軍の追撃を受けて壇ノ浦の藻屑となった。

八百年前と少しの変わりもなく、海峡は東流西流を繰り返している。悠久の大自然を背景に、うたかたの興亡を見せる人の世を嘆く平家物語の吐息を詠み込んだ虚子の名句を、深く自然石に彫りつけた句碑が、海峡に面して建てられている。社殿の後ろに茂る樹木はあの時分よりずいぶん大きくなって、見覚えのある丸っこい句碑を覆うように枝を伸ばしていた。

境内からの細い道が、海沿いの遊歩道につづいている。劇場のスタンドのようにしつらえられた石段があり、磨いた御影石に「観潮テラス」と彫ってあった。そこから少し東に行き、岩場の白い灯台を見下ろす位置に据え付けられた日時計が、直射光線で熱せられた銅板に午後四時の影を落としていた。平家が全滅した時刻である。

対岸の潮流標識が、西流れ五ノットを示しながら明滅している。住友の目には阿鼻叫喚の錦絵

を浮かべる壇ノ浦の海面が、傾いた陽を跳ね返して、滾るような潮を湛えているのだった。彼は小さな白波を立ててせわしなく東へ急ぐ潮流をしばしながめた。

今は海峡に新しい風景が加わり、鉄の吊り橋が潮流の上空にゆるやかな弧をえがいている。早鞆の瀬戸にこの橋がかかったのは、国道トンネル開通から十五年後のことだった。

海底の大トンネルを掘っていることへの誇り高い意識を持ちつづけ、住友は多くの同志とともに戦中戦後の悪条件に見舞われる苦難に耐えながらこれを掘り抜いた。早鞆の瀬戸で平家は滅んだが、トンネル男たちはその海底に凱歌をあげたのだ。

このたびの関門会の会場は、門司側から海峡を見下ろす古城山の頂上にある和布刈山荘である。海の底を歩いて渡るという人類の夢を、世界で最初に実現させる海底トンネル工事に関わるのは、土木技術者としてまさに千載一遇の機会であり、幸せなことだった。青春をこのトンネル工事と共に過ごし、人生のたった一つの思い出に繋がって生きる人々が、寡黙な表情をほころばせて集まってくる。それが関門会だ。

関門会は完工後年一回の会合を、欠かさずつづけてきた。戦時中、新聞は彼らのことを「トンネル戦士」と呼んだ。ダイナマイトの爆発音が轟く海底は、まさに戦場であり、そこで奮戦した精悍な若者も、すでに老兵となった。しかし往年の〝戦友〟たちと話していると生き生きと目が輝きはじめるのだった。

住友は関門会の会員名簿に名をつらねているが、退職後の新しい仕事が忙しく滅多に出席でき

なかった。東京に居を移してからは、ずっと疎遠になっている。今回はトンネル工事の総指揮者だった中尾光信（みつのぶ）を偲ぶ会にもしたいのでどうかと幹事から誘われて、急遽（きゅうきょ）駆けつけてきたのである。

海峡のほとりで孤独なひとときを過ごしたのち、彼はタクシーを呼び、山頂にむかう。急な山道を登るにつれて眺望がひらけ、車窓から望む海峡は陽に照り映えて、大きく蛇行する黄金の帯となってきらめいていた。

トンネル馬鹿

大広間に行くとすでに全員が浴衣姿になり、席についていた。住友が坐るのをたしかめて会は始まった。

「今年も元気な顔がそろいご同慶の至りです。東京からのお二人をはじめ、船橋市・城陽市・姫路市・久留米市、そして地元の福岡・北九州・下関をふくめて総勢二十三人が出席しておられます」

北九州市在住の会員の一人が司会の役をつとめている。彼も頭にはすでに霜をおいているが、若いころの面影は充分にうかがわれた。ずいぶん老いているのではないか、それを見るのが辛いといった住友の予想は外れて、そこにいる誰もが精気をみなぎらせた往年の表情を並べていた。

「ではまず乾杯を住友さんにお願いいたしましょう。住友さんは昭和十二年からの在職で、この中では最古参の人ですから、中尾さんとの思い出は沢山おありでしょう」

作業服に鉄兜――あのころはまだ合成樹脂のヘルメットなどというものはなかった――の姿しか印象に残っていないこの人が、みごとな白髪の老紳士に変身している。しかしトンネル内に響かせていた張りのある声はあのころとちっとも変わっていなかった。

住友がビールを充たしたグラスを持って立ち上がった。

「トンネルが完工した当時、新聞が〝トンネル三馬鹿〟と書いたのは、中尾光信さんと、今ここにおられる伊吹山四郎さん、そして私のことでした。トンネル馬鹿といえば、皆さんにだってその資格があるわけで、これは名誉の称号としてありがたくお受けしたい。残念ながらトンネル三馬鹿のうち一人が欠けましたが、まだ二人はこの通り元気です。それにトンネルは髪鑠として早鞆の瀬戸でがんばっております。われわれも元気でいたいものです。きょうは早くいなくなった中尾さんを、欠席裁判にかけながら、旧交をあたためたいと存じますが、ご馳走を前に長広舌は無粋の至り、積もる話はまた後でするとして、まず、乾杯」

冷えたビールを一気にあおり、彼は畳の席に着いた。食卓には、胡瓜の酢のもの、冷や奴など夏らしい前菜のほかに、関門海峡で獲れたメバルの煮付けなども並んでいる。

それから伊吹山四郎が指名されてスピーチをした。

「私は住友大先輩とちがい、昭和二十七年からの在職で、アメリカ留学から帰国した直後でした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com